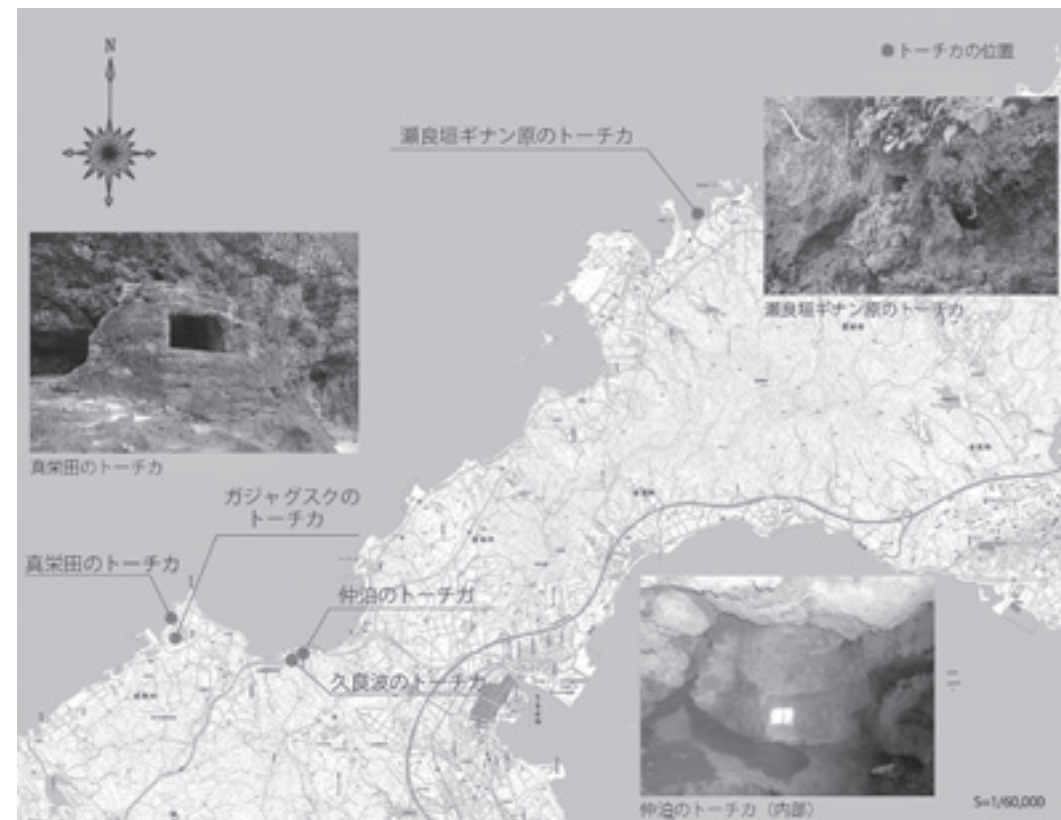


恩納村内の戦争遺跡～トーチカについて～

恩納村内の戦争遺跡は教育委員会で把握しているだけでも現在、30遺跡を数えます。実際はそれ以上あるのですが、開発に伴い現存していない箇所や崩落したり、埋まってしまったり、人知れず現地にあるもの、基地内にあり確認できないところなど、様々な要因で確認できない箇所があります。

今回、ご紹介します戦争遺跡はトーチカと呼ばれる構造物にあたります。トーチカとは、鉄筋コンクリート製の防護陣地を指すロシア語の軍事用語で日本語では特火点と訳されるそうです。トーチカは村内では瀬良垣、



第1図

仲泊のチンバタキと呼ばれる鍾乳洞でできた壕の調査へ向かうため、山をかき分けて進んでいるとトーチカを確認しました。その(仮称)久良波のトーチカは、字山田と字仲泊の境界付近にあり自然の鍾乳洞の入り口をコンクリートと近くにある石灰岩を利用して壁をつくり、銃眼を一つ備えています。

そのトーチカの情報収集を行っていますので、ご存知の方がいらっしゃいましたら恩納村博物館へご一報いただきたく宜しくお願いいたします。

(文化係文化財担当 崎原)



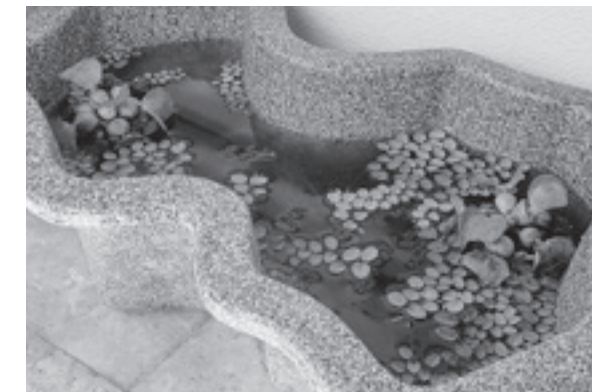
仮称 久良波のトーチカ

仲泊、山田、真栄田で確認されています(第1図)。

トーチカなどの戦争遺跡を知ることで当時の状況を今日に伝えることができます。

村内で確認されているトーチカは、砲撃する方向が西海岸の陸路向けになっています。そのため、米軍の北上または南下のルートを想定して配置されたトーチカと思われます。

メダカの産卵観察



メダカを飼育しているプラスチック容器



メダカを飼育している陶器製の鉢

今年はいずれも電気が降るなど記録的な寒さの日もありましたが、例年に比べるとかなりの暖冬だと言われています。博物館で飼育している生きものでもその傾向が確認できたのでご紹介します。

博物館では少しですが、生きものの飼育をしています。主な生きものは博物館の2階出入口で飼育しているメダカとタイワンキンギョです。どちらもかつては沖縄の水田や流れのゆるやかな小川などの水辺で見かけることができましたが、現在は水田の減少や水質汚染、外来種に棲む場所を奪われるなどして、自然界での絶滅が心配されています。博物館で飼育しているものは既に飼育していた方から分けていただいたものです。

このメダカですが、1月31日に稚魚が10匹程生まれているのを確認しました。その後2月にはホテイアオイという植物に産み付けられている卵も見付けました。

日本に棲むメダカは一般的には水温が20℃を超える日が続くようになる4月～10月頃に産卵をすると言われています。

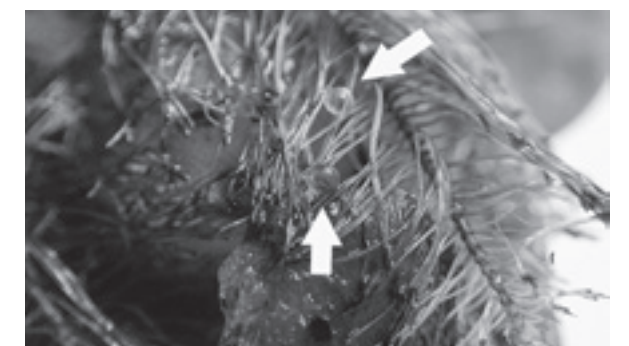
産み付けられた卵が孵化するには「250℃日」(25℃の水温の場合10日、20℃の場合は12.5日)が必要と言われています。しかし、暖かい沖縄では屋外で飼育されている場合でもそれより長い期間、産卵をするようですが、1月に屋外飼育のメダカの稚魚が孵化するというのはあまり聞いたことがありません。博物館でもこれまでは一番遅い産卵が11月下旬にあり、12月に稚魚が孵化していました。それ以降は冬の冷え込みとともに、メダカの活動も少なくなり、冷え込んだ日にはエサもあまり食べなくなります。安定して暖かくなり始める3月になると再び活動的になり、産卵を始めるというのがこれまでの観察で分かっていたことでした。

屋外で飼育している場合、水温も気温の変化の影響をよく受けます。それでも、冬場に産卵し、稚魚が孵化するのは、今年の冬が例年に比べ暖かかった証拠なのかもしれません。今後はこの調子で順調に産卵が続き、メダカがもっと増えてくれると良いなと思っています。

(学芸員 後藤)



1月31日に見付けたメダカの稚魚



2月に確認した卵(矢印)